

● 最優秀賞

生命の大切さを実感し、生命を大切にしようとする 心を育てる工夫

(代表執筆) 茨城県龍ヶ崎市立城南中学校 おかだたえこ 岡田多恵子

1 主題設定の理由

最近、他人の生命を軽視した事件が多発している。これは大人の社会だけの現象ではない。長崎の少年、佐世保の女兒の事件も同様である。なぜいとも簡単に他人の生命を奪うことができるのだろうか？

事件が起きるたびに原因が追求され、議論されてきている。生き物の死や他人の死に対して時に、何ら感情が動かなかったり、無頓着であったりする子が増えてきているとか、人間は生き返ると信じている子がたくさんいるとかという調査が発表されている。それは身近な人の死に接する機会が減ってきたために、死をバーチャルなものと捉えてしまうのではないかなど、いろいろなことが原因として言われている。イラク戦争のニュースなどでは「死者300人」というように、戦場で失われた生命が数字でしか表現されない。その一つ一つがかけがえのない大切な生命であるはずなのに、顔の見えない数字であるために、遠い国の他人事としか感じていないということはないだろうか。これほどまでに生命が軽視されてよいのだろうか。

これからの未来を担う生徒たちに、もっと生命の大切さを実感してほしいと願った。自分の生命は、多くの人から望まれ、与えられ、支えられ、育まれてきたのだということを感じてほしいと考えた。それは自分だけではなく、周囲にいる友達も同様なのだとすることをわかってほしいと考えた。生徒一人ひとりがそういう思いをもてれば、自分の生命も他

者の生命もかけがえのないものであり、互いに尊重し合わなければならないのだということを感じてくれるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 生徒の実態

本校の生徒たちは全体的に素直である。本校には、ちょうど出産を控えた教師が3名いたが、男子も女子も「先生、大丈夫？ 元気な赤ちゃんを産んでね。」と声をかけたり、教師をいたわったりする様子が見られた。また、担任されたことのある生徒や授業を受け持たれている生徒たちには、「先生よかったね。」と教師の妊娠を素直に喜んでいる様子も見られた。

全校生徒に行ったアンケートでも「生命を大切にしていますか。」という項目では、どの学年でも90%以上の生徒が「とても大切にしている。」と答えている。残りの生徒は「普通」と答えており、「大切にしていない。」という生徒は0名だった。

この生徒たちならば、教師の妊娠、出産と自分の誕生とを重ね合わせて考えられるのではないかと考えた。自分たちが先生の赤ちゃんの誕生を待ちわび、喜んでいるように自分の家族や親戚の人達も自分の誕生を待ちわびて喜んでくれたのだと実感することができるであろうと考えた。身近な人の妊娠という出来事を通して、自分の生命の誕生を客観的に見つめられるよい機会であると考え、生命の授業を構想し実践した。

3 授業構想

3人の教師のうち1人は保健体育科の教師であった。その教師（M教諭）は、自分自身を教材として授業を行おうと考えた。

その際、教科だけ、学級活動だけという単発の授業では、単に「妊娠、出産」についての知識しか教えられなかったり、子どもに対する親の愛情という面しか伝えられなかったりするのではないかと懸念し、「生命の誕生」という1つの教材を保健体育科、学級活動、道徳の3つの領域から総合的に扱おうと考えた。

せっかくの題材なので、M教諭と関わりの深い2、3年生を対象に授業を行おうと計画した。

ア 資料作り

- ① 担当の医師に相談をし、協力を得る。

医師は快く承諾してくれた。

- ② 写真資料やVTR資料を作る。

検診のたびに子宮内の胎児のエコー写真や、胎児の様子を録画したビデオを作り、心音も録音する。

イ 授業構想の立案

第1段階 保健体育科

妊娠から出産までの経過としくみについて理解する。

第2段階 学級活動（保健）

出産について知り、生命の神秘や誕生の喜びを知ること、生命の大切さについて考える。

第3段階 道徳（生命尊重）

赤ちゃんの誕生を通して、かけがえのない生命を大切にしようとする心情を育て、生きる喜びを感じさせる。

ウ 保護者との連携

- ・授業の様子や生徒の感想を学級通信等で家庭に知らせる。
- ・道徳の時間に保護者に手紙（我が子の誕生について）を書いてもらい、生徒に紹

介する。

- ・家庭でも、生徒が生まれた時のことについて話題にしてもらうように呼びかける。
- ・本校では、どの学級にも父子家庭、母子家庭、両親欠損家庭などの生徒がいるので、これらの授業を通してさびしい思いをする生徒が一人でもいないように配慮する。そのため、一人ひとりに親からの手紙を読ませるという活動は行わないなどの配慮をした。
- ・先天性の病気や障害をもっている生徒がいるため、教師の発言には配慮をし、「健康な体に生まれてきてくれてよかった。」「五体満足」等の発言はしないように心がけた。

4 研究の仮説

身近な人の赤ちゃんの誕生を自分のこととして捉えられるような工夫を行えば、自分の生命の大切さを実感することができるであろう。そして、その思いを通して友達や世界中の誰もが、自分と同様に大切な生命をもっていることに気付かせることにより、かけがえのない自他の生命を尊重しようとする心を育むことができるであろう。

5 研究の実践

(1)保健体育科の授業の実践

保健の授業の中で、受精から出産までのしくみについて教えると共に、生命の誕生の不思議さやすばらしさを感じさせることをねらいとして授業を組み立てた。

特にお母さんのお腹の中で、赤ちゃんがどのように育ち、どのような動きをしているかを、実際に超音波の映像によって生徒に見せることで、生命の不思議さと大切さを感じさせることができるのではないかと考えた。

M教諭が自分の主治医である産婦人科のT

医師に授業について相談したところ、理解を示してくれた。そして、月ごとの検診のたびに、エコー写真を撮影したり、子宮内の胎児の様子を撮影したVTR資料作りにも協力してくれた。

また、授業の中で実際にお腹に機械を当てて、子宮内の胎児の姿を生徒に見せたいと考え、「エコーの機械を貸してほしい。」と頼んだところ、「機械の操作は素人にはできないから。」と言って、当日医師が来校し、授業に参加してくれることになった。そこで、医師と教師によるTT(ティームティーチング)の授業を計画し、次のような流れで授業を行った。

ア 授業の流れと生徒の活動

導入 精子と卵子について知らせ、受精卵ができるまでのしくみについて説明する。

展開 検診の時に撮影したエコー写真を見せながら、胎児の大きさや体の組織ができあがっていく様子、成長の様子について、教師が医師に質問する形式で授業を進める。生徒からの質問に対しては、親としての心情に関わることについては教師が、医学的なことについては医師が答えるようにした。

その後、実際に教師のお腹に器械を当てて、子宮内の胎児の様子を見せた。8ヶ月になる胎児は手足の形もはっきりと識別でき、お腹の中で動いている様子や時々あくびをする様子がモニターに映し出されるたびに、生徒の驚きの声と歓声が上がった。

まとめ 生徒は積極的に感想を発表した。「お腹の中であんなに動いているなんて知らなかった。」「心音がしっかりと聞こえ、生きているんだなと感じた。」「あくびをする様子がかawaii

かった。早く生まれてきてほしい。」「私もああして生まれてきたんだな……と思った。」等の感想が聞かれた。また、「私は、生まれる時首にへその緒が巻き付いていて、危なかったんだって。」と自分の生まれた時の様子について語ってくれた生徒もいた。

最後に医師が「君達はすごい確率で生まれてきた。生まれてきたこと自体が奇跡のようなものだから、自分の生命を大切にしてほしい。」と語ると生徒は真剣な顔で聞いていた。教師が語るよりも、専門的な知識とたくさんの赤ちゃんを誕生させてきた産婦人科の医師が語る方が、生徒は一つ一つの言葉に重みを感じたようであった。

イ 事後の様子

M教諭は市内の総合病院に通院しており、出産もそこで行った。主治医のT医師はM教諭の出産も担当し、分娩室にビデオを設置し出産の様子をVTRで撮影することをM教諭が相談したところ、快く承諾してくれた。また、誕生直後の赤ちゃんの撮影やへその緒、胎盤などの写真撮影も担当してくれた。

M教諭は自分が分娩室に入ってから出産までの間、分娩室の外で待っている家族の様子も夫に頼んでVTR撮影していた。M教諭には幼稚園に通うKという男児がいたが赤ちゃんの誕生を待つK児の姿には「兄になる喜び」と「母を心配する様子」が見られた。

出産後、入院中のM教諭のもとには、連日生徒たちがお祝いに駆けつけた。後日M教諭は「さすがに次の日来られた時はつらかった。」と笑顔で語っていたが、生徒たちがまるで自分の家族が生まれたように喜んでくれていた様子を、心からうれしそうに語ってくれた。

(2)学級活動（保健指導）の授業の実践

保健体育科の授業を受けて、養護教諭が「出産と赤ちゃん誕生」を題材として「生命の大切さ」を考えさせる学級活動の授業を行った。産後休暇中のM教諭にも授業に参加してもらい、TTで授業を行った。

前回の授業で妊娠から8ヶ月（約32週）までの胎児の成長について学習しているので、本時の授業の前半では、8ヶ月から10ヶ月（約40週）までの胎児の成長と出産について、M教諭のVTR資料や写真資料を提示しながら養護教諭が説明するという学習内容考えた。授業の前半は「出産について学ぶ」学習とし、「出産までの胎児の成長と出産時の胎児の様子が分かる。」ことをねらいとした。

後半ではM教諭に妊娠中や出産の際の気持ちについて語ってもらうことで、「親から与えられた生命」と「周囲から支えられている生命」の重さと大切さについて生徒一人ひとりに考えさせることをねらいとした。

本授業は学級活動の保健指導であるので、全体的には授業の前半を重点的に取り扱い後半部分については、次の道徳の授業への布石というねらいで扱うことにした。

ア 授業計画

産休中のM教諭に何度か来校してもらい、授業で使用する資料を選択し、指導の流れについて相談した。授業の前半は、胎児のエコー写真との絵を提示しながら胎児の成長の様子について知らせることにした。体のいろいろな器官や組織ができていく様子を、実際の写真で段階的に確認していくことで、生命の不思議さと尊さを感じさせたいと考えた。また胎児の生命を支えるへその緒や胎盤の写真を拡大し、生徒に提示しながら、養護教諭とM教諭の対話形式で授業を進めることにした。

また後半のM教諭の話のねらいと内容について打ち合わせを行った。前半では知識・理解面を重視し、後半は我が子の誕生を心待ちにする母親の思いや願いと誕生の喜びを知る

ことで「生まれてきてよかった。」「与えられた生命を大切に生きていきたい。」という思いを感じさせることを重視した。赤ちゃんがお腹にいる間、母親がどれだけ赤ちゃんのことを気遣い、心配し、大切にしているかを語ってもらうことで、自分たちも同じように大切に守られてきたのだということを実感してほしいと考えた。

イ 出産について学ぶ

授業の前半では、主に妊娠8ヶ月から10ヶ月の間に、子宮内の赤ちゃんがどのように成長していくかということについて学んだ。養護教諭がM教諭の胎児のエコー写真を月齢ごとに提示しながら、体の組織ができていく様子について説明した。胎児の生命を支える「へその緒」の役割と重要性について説明したところ、「うちでも私のへその緒をまだとってあるよ。」という女子生徒の発言をきっかけに「うちにもある。」「お母さんと私をつないでいたんだね。」というつぶやきが、教室のあちらこちらから聞かれた。

生徒にも妊婦を体験させようと考え、市の保健センターから妊婦体験器具を借用し、授業の中で生徒に実際に装着させた。臨月の妊婦のお腹と同じ大きさ、同じ重さの「お腹」であるため、約7kg～8kgの重さの器具である。装着した生徒があまりの重さに、「赤ちゃんってこんなに重いんですか？」と質問したので、胎盤の写真を提示しながら胎盤の



●写真1／説明している養護教諭

役割について説明した。

約3kgの赤ちゃんの生命を支え、育てるために、同じくらいの重さの胎盤が必要であるということ、胎盤の役割、そして赤ちゃんを出産した後は胎盤を体外へ出さなければならないということなどを生徒に知らせた。

生徒は胎盤の写真を珍しそうに眺めていた。出産直後の分娩室で撮影された写真なのであまりにもリアル過ぎるのではないかと心配したが、逆に一つの生命を誕生させることの大変さを実感したようで、生徒からは「お母さんって大変だね。」という声が聞かれた。

ウ 親の思いを知る

授業の後半は、生徒に「生命を大切にしよう。」という気持ちをもたせることをねらいとして、主に出産前後の様子やM教諭の「母親」としての思いを中心に語ってもらった。

M教諭は、主治医の指示で、夏でも足を冷やさないように厚めの靴下を必ず履いていたことや、妊娠による貧血症で出産の際も大変だったことを話しながら、「みんなのお母さんだって私と同じように、いろいろと大変な思いをしながらみんなを守ってきたんだよ。」と生徒に語りかけた。M教諭が産休に入るまでの間、共に過ごしてきた生徒達なので、誰もがM教諭がどれだけお腹の赤ちゃんのことを気遣っていたか、また自分たちが「先生の赤ちゃん、元気に生まれるといいね。」とM教諭を気遣ってきたことを知っていたので、



●写真2／M教諭と生後2ヶ月の赤ちゃん

M教諭の言葉が素直に心にしみていくようだった。授業後の感想にも生命の神秘さへの驚きと、M教諭への感謝といたわりのことばがつづられていた。

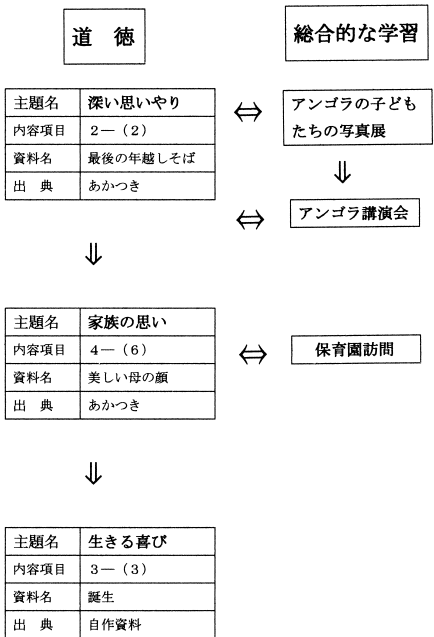
(3)道徳の授業の実践

学級活動の授業の2ヶ月後に、M教諭の出産を題材にした道徳の授業を計画した。本授業では保健体育や学級活動の授業とは異なり、出産前後のM教諭に焦点を当て、「生まれてきた喜びを感じさせると共に、与えられた生命を大切に生きていこうとする心情を育てる。」ことをねらいとした。

H子ちゃん(M教諭の第2子)も4ヶ月を過ぎ、首が座り体つきもしっかりとして、表情が豊かになった。まだ人見知りをしないため、家族以外の人がだっこしてもニコニコしていて、授業に参加してもらうにはよい環境が整った。

そこで、授業のねらいを十分に達成できるように、「生きる」ことをテーマにした短期的な道徳の授業プログラムを考えた。

ア 「生きる」価値を考える授業プログラム



本校では2年前から、アンゴラでNGO活動を行っている「アンゴラ子どものまちプロジェクト」のリーダーのIさんを通して交流活動を行っている。Iさんの講演会を行い長い間内戦が続き、たくさん子どもたちが戦争と飢餓のため死んでしまったり、家族と離れ離れになってしまったりしているアンゴラの現状について知ると共に、Iさんが行っている「子どものまち」という施設で生活しているアンゴラの子どもたちとメールを通して交流している。日本の子どもたちに比べると、「生きる」ことが大変困難なアンゴラの子どもたちの現実の姿を知ること、「生きる」ことについていろいろな思いをもつことができるのではないかと考えている。

アンゴラの現状を知るにつれ、「平和な日本に生まれてよかった。」「かわいそうだな。」「何か私たちにできることはないかな。」という生徒の声が高まってきたが、ほとんどの生徒が、まだ他人事として捉えている。日本の中学生としては、当たり前であると思う。しかし、この経験が、将来、イラクやチェチェンの犠牲者の数を、数字としてではなく、「喪われた生命」の重さとして、重く受け止められる心を育てるのに役立つのではないかと期待している。

イ 事前の授業

「誕生」の授業で、生徒たちに「生命の尊さ」と共に「家族の愛情」を実感させたいと考え、事前に感動資料を用いた2つの授業を計画し、実践した。

- ① 「最後の年越しそば」の授業について
本資料は、「肝臓ガンで2ヶ月の命と医師から宣告された父が、大晦日に外泊の許可が出た。最後の外泊であったが、父は突然外泊しないと言い出す。そればかりか家族に蕎麦の材料を用意させ、大晦日に病院で蕎麦を打ち、正月に帰宅できない身よりのないお年寄りの入院患者にごちそうした。心の中で、一番かわいそ

うなのは自分じゃないか……」と思いながら、中学生の私は涙を隠して父の蕎麦を食べた。」という、生徒作文を元にした資料である。

この資料を読んだ生徒たちは、しばらくの間沈黙していた。切望していた外泊を取り消してまで、他人のために尽くす父の姿に心を打たれた様子だった。「死」が間近に迫った時にどんな生き方をするのかということ、「父」の姿を通して考えた。

「私にはとてもこんなことはできない。お父さんはすごい人だ。」という感想や、「私も、自分のことよりも他人のことを考えられるような人間になりたい。」という感想が、生徒から出された。

② 「美しい母の顔」の授業について

本資料は、「私は、顔に大きなやけどがある母を友達に見られるのが嫌だった。ある日家に忘れてきた宿題を母が学校に届けに来た。母を友達に見られた私は、母を怒鳴りつけてしまった。その晩、父から母のやけどの真実を知らされた。小さい頃火事にあい、母は幼い私を命がけで救って顔にやけどをした。しかし、そのことが私の負担になってはいけな」とい、母は何も言わなかったのだった。」という資料である。

主人公の、母のやけどを友達に見られると恥ずかしいという気持ちにも、本当のことを知って深く反省する気持ちにも、自分のことを大切に思ってくれる家族への愛情と感謝の気持ちにも共感しやすい資料であった。生徒の発表にも、「子どもを思う親の、特に母親の愛情は、子どもが親を思う気持ちよりも深いものだと感じた。」という内容のものが多かった。

本校の2、3年生には、家庭的に恵まれない環境の生徒がたくさんいるので、その生徒たちが嫌な思いをしたり、冷ややかな見方を

するような展開にならないように、教師の発問や言い方には留意した。しかし、生徒は素直に主人公に自己投影し、気持ちを語ることができた。中には祖父母に育てられている生徒もいるが、保護者が一生懸命働いて自分たちを育ててくれているという自覚を生徒がもっているため、ひがんだ見方をせず、素直に親の愛情を感じることができたのではないかと思う。

ウ 「誕生」の授業について

M教諭とH子ちゃんを迎えて、「誕生」という道徳の授業を行った。H子ちゃんがお腹の中で成長し、出産を迎える前後に焦点を当て、あえて読み物資料は作らずに、M教諭と担任の対話形式で授業を進めることにした。

① 導入

「胎児」の写真を導入に使用したいと考えていたが、いろいろな写真集や雑誌を探しても、なかなかいい写真が見つからなかった。その時、全くの偶然であるが、その学級の一人の女生徒が美術の時間に描いた、胎児を抱きかかえるように伸ばされた両手をモチーフにしたデザイン画が、「誕生」のイメージにぴったりであったため、その女生徒の了解を得て、導入に使用した。

その絵を生徒に提示し、絵から感じたイメージを自由に語らせ、授業への興味を喚起することをねらいとした。



●写真3／絵からイメージを広げる

② 展開

中学生にとって母親の気持ちに自己投影するのは難しいことであるが、お腹の赤ちゃんが大きくなっていく様子をプロジェクターでスクリーンに投影しながら、「お母さんはどんな気持ちだっただろう。」と問いかけたところ「早く生まれてほしいな。早く顔が見たい。」「元気に生まれてほしい。」「みんなが待っているから、早く生まれてきてね。」「元気に育ててほしい。」という素直な発表が続いた。その他に、「お兄ちゃんがかわいくなってくれるかな。」「お兄ちゃんがひがんだりしないかな。」というような上の子を気遣う発表が聞かれた。その生徒は、上に兄姉のいる子で、決して仲が悪いわけではないのだが、妹としてのやや複雑な感情が垣間見えた。

出産の場面では、驚きと感動で声が出ない状態であったが、「無事に生まれてくれて、本当によかった。」「元氣な赤ちゃんでよかった。」という発表が相次いだ。担任がM教諭に「この時、M先生はどんな気持ちだったんですか？」と尋ねたところ、「今、みんなが言ってくれたように、無事に生まれてきてよかったという気持ちでいっぱいでした。それと同時に、家族やお医者さん、看護師さんたちに対する感謝の気持ちがこみ上げてき



●写真4／H子ちゃん誕生の場面

ました。『ありがとうございました。』という気持ちでした。この子にも、生まれてきてくれてありがとうという気持ちでいっぱいでした。」と、出産直後の気持ちを語ってくれた。「周囲の人々や赤ちゃんに対する感謝の気持ち」は、このような経験をしたことのない中学生には思いもよらないことだったようだ。

この後、隣室でH子ちゃんの誕生を待っていたお父さんやお兄ちゃんの映像が映し出された。生徒たちは、家族の気持ちにも十分に共感することができた。

「H子ちゃんの誕生」「自分の誕生」に重ね合わせ、「生まれてきてよかった。」「自分が生まれた時も、みんなが喜んでくれたんだ。」「せっかく授かった生命だから、大切にしなければいけない。」という素直な自分の気持ちを語ってくれた。中には、気持ちが高ぶって泣き出す女生徒もいた。

その時、ずっと眠っていたH子ちゃんが目を覚ましたので、「だっこしたい人?」と担任が尋ねたところ、何人かの生徒が出てきた。両手にH子ちゃんの重さを感じ、「これが生命の重さなんだな。大事にしくっちゃ。」と語ってくれた。



●写真5／H子ちゃんをだっこするI男

③ 終末

クラスの保護者に事前に頼んで、匿名で子ども宛の手紙を書いてもらっていた。生徒の家庭環境の関係で全員の保護者に書いてもらうことは困難であったため、一人の保護者にお願いして、子どもには内緒で書いてもらった。

子どもが生まれた時の様子や、親としての心情が伝わってくる内容であり、生徒も、自分がこの世に生まれたことを素直に喜ぶことができた。

このように生徒が自己肯定感をもち、自分の誕生が周囲の人達を喜ばせたと感じることができたのも、H子ちゃんの存在が大きかった。授業の間も、生徒たちはちらちらとH子ちゃんを見て、目が合うとニコッとほほえんでいた。

授業後、生徒が書いた授業の感想とM教諭への手紙には、「生命」について真剣に考えた様子が切々と綴られていた。

〈I男の感想〉

僕の道徳の授業を行っての感想は、実にいろんな事を考えた授業だなということです。いつ指されるか分からないので考えたのではなく、本当に自分の本心で考えました。道徳の授業は、いろんな発言をしていいので、たくさんの考えが浮かびました。

生命の誕生、ただこの事について考えました。そして、考えたのは「生命の誕生の時とは、いろいろな事を思わせてくれる。」という事です。「感謝」「うれしさ」「不安」、他にもありますが、たくさんの感情をたくさん受けて生まれてくると、自分はそう思いました。さらに、生命の重さも再確認しました。

赤ちゃんがガラスの宝石だとすると、自分たちはその宝石に「色」がついたようなルビーやサファイヤだと、最後に感じました。

最後に、この事を感じさせてくれたM先生、H子ちゃんに「感謝」したいです。

〈K子の感想〉

私は、道徳の授業を通して命の大切さを改めて考えました。自分は少しずつ成長して14歳になり、よく知らなかった自分の生まれた頃のことも親に聞くことができ、分からなかったこともよく分かりました。

赤ちゃんは小さい頃からお腹の中でしっかりと生きていて、『命』はすごいと思いました。赤ちゃんができて、お腹の中にいる時は、誰も顔など見たこともないのに、愛をもって接することができていて、自分ができた時も、こんなふうにみんなから祝福されてきたのかなあ？などとも思いました。

あまり勉強することのない赤ちゃん・生命の誕生は、自分が思っていた以上に大変で勇気があることだと思いました。M先生が「生まれてきてくれて感謝している。」と言っていたのを聞いて、私は親に「生んでくれてありがとう。」という気持ちになりました。

両親が離婚し、祖父母に育てられている女生徒は、以前「私の親は中絶するのが面倒だったから、私を生んでくれたんだよ。できちゃったから生んだだけだよ。別に私のことを欲しかったわけじゃないんだよ。」と言っていたが、この授業の感想の最後に「私も子どもを産んで、自分の家族がほしいと思った。絶対にかわいがって育てる。」と書いていた。

その後、佐世保市の女児の事件が起きた時に、どの学級でもその事件のことを話題にしたところ、中学3年生でも「嫌なことがあったら、先生や友達に相談すればよかったのに。人を殺すなんて、絶対にやってはいけない。」という意見が相次いだ。この子たちの心は健康だと感じた。

6 成果と今後の課題

(1)成果

I男やK子以外の生徒も、これらの授業を

通して「自分の生命」「他人の生命」について、深く考える機会となった。H子ちゃんの誕生に自分を重ね合わせて、自分の生命を支えてくれている人達に思いを馳せ、このような思いを受けてこの世に誕生した生命だから大切にしなければならないと考えるようになった。

自分の妊娠、出産を絶好の機会と捉え、自分自身を教材として、生徒に「生命の大切さ」を実感させたいと考えたM教諭の体当たりの授業が、生徒の深い感動を呼んだようであった。

死を扱うことによって、生命の大切さを考えさせることもあるが、生徒の中に重い心臓病と闘っている生徒がいるため、その生徒の学年では病気による「死」を扱わないようにしている。今回は「誕生」を扱ったことで、その生徒にも希望をもって生きていこうという前向きな気持ちをもたせることができた。

これ以外にも、「生命」の授業の資料は私たちの周りにも、生徒の周りにもたくさんころがっている。時期を逃さず、新鮮で、印象的な「生命の授業」を心がけていきたい。

(2)課題

生徒たちの家庭環境や生育歴が、子どもたちの人間性や道徳性の育成に大きな影響を与えているということを、本校ではひしひしと感じている。家庭の教育力に期待できないことも多々ある。しかし、やはり心を育てる一番の場は、家庭であり、地域であると思う。幸い、本校の保護者や地域の人々は、学校に対して概ね協力的である。良くも悪くも、中学生の態度や行動に、地域の方が目を向けてくれている。学校と家庭・地域がもっと連携し、力を合わせて、「自他の生命」を大切にできる人間を育てていく必要があると考えている。